

ディケンズとマルサス(2) — 『クリスマス・ブックス』 理解のために —

榎 本 洋

4 祝宴の政治学(2)

ところで改心したスクルージの姿とともに強調されるのが、あるべき「共同体」の姿である。スクルージと現在の幽霊がクリスマス当日眼にするのは“the people who were shovelling away on the house-tops were jovial and full of glee; calling out to one another from the parapets, and now and then exchanging a facetious snowball — better - natured missile far than many a wordy jest” (47-8) と雑踏を歩きかう人々の姿である。スクルージの甥フレッド (Fred) も路上を歩きかう人々を “fellow passengers to the grave, and not another race of creatures bound on other journeys” (9) といった具合に、人々の生涯を人生という途上において何度も交叉するものと描いている。その意味では、クリスマスの当日、生まれ変わったスクルージが雑踏の中へと消えて行き、人々と意思の疎通に余念がない様はいかにも象徴的である：“He went to church, and walked about the streets, and watched the people hurrying to and fro, and patted children on the head, . . . and found that everything could yield him pleasure” (88). スクルージはそれからフレッドの家へ向かう。ここでの「共同体」とは漠然と村落、地域社会を指すものではなく、親と子や夫婦の情愛を紐帯とした近代的な「家族」である事に注意すべきだろう。クラチット一家の様子 (80-81) 等、物語の中には家族の団欒が見受けられ、また結婚などの夫婦のあり方が示されているので、「家族」の理想的なありようがそれぞれの物語の中心に置かれている。次に引用する「鐘の精」の結末は新年での結婚披露宴という、愉快的な気分で幕を閉じ

る。

Before Will Fern could make the least reply, a band of music burst into the room, attended by a lot of neighbours, screaming 'A Happy New year, Meg!' 'A Happy Wedding!' 'Many of em!' and other fragmentary good wishes of that sort. The Drum . . . then stepped forward, and said:

'Trotty Veck, my boy! It's got about, that your daughter is going to be married to-morrow. . . . and don't wish you both all the happiness the New Year can bring. And here we are, to play it in and dance it in, accordingly.'

Which was received with a general shout. The Drum was rather drunk, by-the-by; but never mind. (180-1)

『焔辺のこおろぎ』ではメイ・フィールディングとの結婚を断念したタックルトン (Tackleton) がスクルージ同様に改心し、チッキンストーカー (Miss Chickenstalker) も加わっての祝宴となる (277-8)。『人生の戦い』は少し趣が異なり、強調されるのは家族の団欒というより、理想とされる夫婦、結婚のあり方である。とりわけ注目すべきはメアリアン (Marian) とマイケル・ウォーデン (Michael Warden) の「駆け落ち」の扱い方だろう。姉グレイス (Grace) が自分の婚約者アルフレッド (Alfred) に密かに思いを寄せていることを知ったメアリアンは、偶然、ジェドラー家 (Jeddler) に何年か前に寄寓した、ウォーデンと「駆け落ち」をすることで自ら身を引く。結末ではメアリアンが叔母のマーサ・ジェドラー (Martha Jeddler) の許に七年間、身を寄せていたことがわかる。つまり、ウォーデンとメアリアンの駆け落ちは見かけ上の偽装に過ぎず、二人はその後別行動を取っていたことわかり、体面を落としてまで結婚をしていたわけでないのである。いささか手の込んだ、不自然なプロットで強調されるのはメアリアンの自己犠牲、ひたむきな姉妹

愛、家庭と結婚を理想とする精神構造である。次の「悪かれた男」では同情心を失ったレッドロー (Redlaw) らがミリー (Milly) の献身的な行為で在りし日の感情を取り戻し、人々が創立者の画のある講堂でしめやかに会食を取るところで終わる (471-2)。後者の二作品は、それまでの作品に見られる底抜けの陽気さはないものの、家族的な情愛を軸に過去に対する和解と許しを呼びかけている点では、従来のテキストの延長に位置づけられるものだろう。ここに反映されているのが「家庭の礼賛」という新たな風潮であり、「クリスマス・ブックス」もそうした風潮とは無縁ではないのである。寧ろ、キャサリン・ウォーターズが指摘するように、40年代に出版された「クリスマス・ブックス」は「共同体(村)のクリスマス」の消滅を嘆き、祝宴を中心とした「家族のクリスマス」への移行する端境期に出版されたということである。そのため、これらのテキストでは新旧のクリスマス風景が混在している。テキストで前者に相当するのがレディー・ボウリー (Lady Bowley) のためにボウレー卿が新年に開いた誕生会で(そこにウィリアム・ファーン [William Fern] が自らの窮状を訴えに姿を現す)、これが所謂、家父長的な村の祭りとしての旧いクリスマスのあり方といえる。

There was to be a great dinner in the Great Hall. At which Sir Joseph Bowley, in his celebrated character of Friend and Father of the Poor, was to make his great speech. Certain plum-pudding were to be eaten by his Friends and Children in another Hall first; and, at a given signal, Friends and Children flocking in among their Friends and Fathers, were to form a family assemblage, with not one manly eye therein unmoistened by emotion.

But there was more than this to happen. Even more than this. Sir Joseph Bowley, Baronet and Member of Parliament, was to play a match at skittles — real skittles — with his tenants! (149-50)

ディケンズの有名な肖像画を描いた画家のマクリース (Daniel Maclies) の *Merry Christmas in the Baron's Hall* (1838) (図①) は、まさしくこうした地主、小作農、領民などの間で行われる旧いクリスマスの在りようを伝えるものである。「ピクウィック・ペーパーズ」(*Pickwick Papers*, 1836) のディングリー・デル (Dingley Dell) のクリスマスも同様に “the significance of the practices associated with the feudal Christmas” (Waters, 64) を連想させるという。ウォーターズはこうした旧式のクリスマスを回顧的に懐かしむリー・ハント (Leigh Hunt)、スコット (Walter Scott) の姿勢にディケンズも幾分、負うことを認めているものの、新旧のクリスマスのあり方を対立的に捕らえているせいか、具体的にディケンズが旧式のクリスマスのどこに共感したかは指摘してない。蓋しディケンズにとり新旧のクリスマスは必ずしも対立し、排除するものではなく、お互い相補的な関係にあったものと思われる。旧式のクリスマスが一方では主人と徒弟、領主と小作らの理想的な、しかも家族的な関係を示す格好の舞台を提供していることを考えれば、これらと一見、対を成すと思われるクリスマスと家族が一体化する「家族の祭り」としてのクリスマスともそれほど隔たっていないのではないだろうか。労働者と産業資本家 (或いは、地主、領主等) の融和関係を望む姿勢は他のテク



図①

ストでも垣間見ることが出来るからだ¹⁾。

クリスマスと家族が一体化し、新しい「家族の祭り」としてのクリスマスが成立する背景には、近代家族への脱皮という現象がある。つまり、家族の構成員（召使等を除く血縁によるもの）の感情の一体化、家族にとり干渉的な存在ですらあった強固な共同体生活の解体など、家族史の分野から様々な知見を得ることができる（Shorters, 53）。しかし、ここではまず何よりも労働者階級が家族を持つこと、つまり結婚し家族をもうけ、養うという基本的なことすら、そもそも不可能に近かったことが、参事会員キュートが結婚間近のメグとリチャードに対して言う台詞からも十分に伺える。さしずめキュートが描くところの将来は、当時の一般的な労働者が辿る末路なのだろう。

You'll have children — boys. Those boys will grow up bad, of course, and run wild in the streets, without shoes and stockings. . . . Perhaps your husband will die young (most likely) and leave you with a baby. Then you'll be turned out of doors, and wander up and down the streets. Now, don't wander near me, my dear, for I am resolved to Put all wandering mothers Down. (114-5)

キュートは更に“what are thinking of being married for? What do you want to be married for, you silly fellow?” (115) と聞き、絶望に突き落とされたりチャードは希望を失い、自堕落な生活を送るようになる(169-70)。この一部は、トロッティ・ベックの見る夢の一齣となって後に再現される。要するに、中産階級にとって当たり前存在であった「家庭」ですら、労働者階級には経済的に持つ余裕すらなかった「贅沢品」なのである。

その労働者、下層階級の家族がいかに分断され、その結果、「家庭」というものが彼等から如何に程遠い存在であったかは、エンゲルスが『イギリス労働者階級の状態』の中で詳らかにしている。これは、エンゲルスが22歳のと

きに父親が経営する紡績工場があるマンチェスターを訪れた際に書き上げたルポで、マルクスと出会う以前の代表的な著作でもある。メイヒュー(Henry Mayhew) さながらにマンチェスターの労働者を取材しながら、エンゲルスは彼らの居住地区の劣悪な環境、悪臭等を指摘し“a stench which alone would make it impossible for a human being in any degree civilized to live in such a district” (Engels, 90) と述べている。同時に“cellar dwellings” (95) と呼ばれる彼らの地下室兼住居は、ウィリアム・ファーンの家が“hove” (*Christmas Books*, 128-9) と呼ばれるのと同じである(図②)²。更にこうし



図②

た人々の住居が “a centre for the plague” (Engels, 101), “the focus of crimes, the scene of the deed” (102) といった具合に疾病と犯罪の温床になる程、その住環境の劣悪さ、不潔さが列挙される。当然、住人の生活も酷く荒んだものである。酒が唯一の気晴らしであること (133)、子供の教育には無関心であること (139)、また貧困ゆえに労働者が絶えず曝されている不安定な立場が “Everything that the proletarian can do to improve his position is but *a drop in the ocean* compared with the floods of varying chance”, とか “Either he seeks to keep his head above water in *this whirlpool*” (144, italics mine) といった具合に大海のイメージで、とりわけ後者は後年のギッシング (George Gissing) の同名の小説タイトルを彷彿とさせる連想で語られる。さらに、工場の機械化の導入により女性の雇用が促された反面、長時間労働のために育児や教育が放棄され、労働者の家庭はほぼ崩壊に瀕しているという。1839年の英国全土の工場のうち、18歳以下の人口と、女性の労働者の占める割合を統計で列挙した後、エンゲルスはこう指摘する。

The employment of women at once breaks up the family; for when the wife spends twelve or thirteen hours every day in the mill, and the husband works the same length of time there or elsewhere, what becomes of the children? They grow up like wild weeds; they are put out to nurse for a shilling or eighteenpence a week, and how they are treated may be imagined. (Engels, 165-6)

つまり、労働者階級に取り、食糧はもとより、テキストに登場するような家庭、家族すら、劣悪な住環境と相俟って成り立ちようがなかったのである。となると、労働者階級の側から見ると、家庭というものがある程度、理想化を免れなかったのは想像に難くないだろう。タックルトンが家庭のことを “Four walls and a ceiling! (why don't you kill that Cricket? I would! I always do. I hate their noise.) There are four walls and a ceiling at my

house. Come to me!” (206) と晒い、ジェドラー博士 (Dr. Jeddler) が同じような皮肉を飛ばしても (316)、下層階級の人間にとり、「家庭」そのものを持つことが困難であった事態には変わらないのである。

「クリスマス・ブックス」では献身的な女性が数多く登場する。「悪かれた男」のミリー、「妒逆のこおろぎ」のドット、「人生の戦い」のグレイス、メアリアンの姉妹などが代表的な例だろう。メグ（「鐘の精」）、クラチット夫人（「キャロル」），“My little woman” (411) と夫から言われるテタビー夫人 (Mrs. Tetterby) なども際立った家事能力を考えればここに加えても良いだろう。後半の三部作にこのような女性の印象が突出しているのは、テーマが社会的な問題から家庭的な、内省的なものへの変転を裏付けるものである。ピアリーピングル夫人 (Mrs. Peerybingle) ことドットの感化力は “Household Spirit” (251) と形容され、ミリーはレッドローの学生エドモンド・ロングフォード (Edmund Longford) に対して実に献身的に振舞う (422-24)。そのため夫や義父から “a motherly feeling” を讃えられ、 “You are like an angel to father and me” (469) と言われるほどである。同じ事はミリー程でないにせよ、姉のために自己犠牲を厭わないメアリアンや夫に尽くす姉のグレイス、そしてジェドラー家に仕え、ベンジャミン・ブリテン (Benjamin Britain) と結婚するクレメンシー・ニューカム (Clemency Newcome) にも言えることだろう。要するに彼らはヴィクトリア朝の文学では定番となっている現実離れした自己犠牲、献身振り (夫、家庭への) で際立つ「家庭の天使」(the angel in the home) の一例なのである。ラスキン (John Ruskin) の「ゴマとゆり」(*Sesame and Lilies*, 1865) を引き合いに出すまでもなく、ピアリーピングル夫人、ミリーなどの人物像と彼らの家庭が過度に理想化され、感傷的な紋切り型の印象を与える言うまでもない。しかし、中産階級や後世の読者にとって陳腐で「凡庸」に（このフレーズは自分を賢いと思う批評家などに好んで用いられるが）思われても、当時の (1840 年代) 労働者にとり、そのような家庭を養い維持することすら、想像の埒外にあったのではないだろうか。事情を知らずに、ディケンズの女性像、家庭像を凡

庸と批評するフェミニスト批評こそ凡庸というものだろう。

ところで、こうした家庭礼賛をマルサス批判という文脈で見ると、ヴィクトリア朝の小説でしばしば見られる子沢山の家庭もこの範疇に入ると考えても良いのではないだろうか。この場合、労働者にとって理想であると同時に、反マルサス的な批判の変型と見て差し支えないであろう。ここではテタビー一家（五人の子持ち）がそれに該当する。ディケンズの他のテキストでは、*The Sketches of Young Couples* (1840) という小品の中の “The Couple who dote upon their children” に出てくるウィフラー夫妻 (Mr. & Mrs. Whiffler) などはさしずめその代表格だろう。またトロロップ (Anthony Trollope) の『バーチェスター寺院』(*Barchester Towers*, 1857) に登場するクイヴァフル牧師 (Rev. Quiverful) は 14 人の子持ちと紹介されている。こうした、過度に子沢山の家庭を文学作品に登場させることは、やはりそのような家庭が実際に存在したという事情や、実生活面での避妊等の知識の普及とも関わるだろう。しかし、子沢山の家庭像の存在を考えると、マルサスの影響を考慮しないのは余り妥当でないように思われる。つまり子沢山の家庭を誇示することが、その一家の扶養能力を経済的に裏付けている事を考えれば、そこに反マルサス的な主張、色合いを見て取ることは可能ではないだろうか。

以上の事柄が、ディケンズがマルサスやその言説に対する表象的な批判のありようである。つまり「生」に対する抑圧には食糧、飲食行為という極めて日常的な素材を用いることで、そして、もう一方の「性」に対しては家庭、家族を持つことの困難さという周辺事情を描くことで、ディケンズは当時流行したマルサスや俗流のマルサス的な言説に一矢報いたのである。ところで、こうしたマルサス的な言説に対する批判は、主にそれを発信する側である上、中流階級側に対して為された事は言うまでもない。つまり、労働者側の立場を弁護し、その利益を代弁するという形である。しかし、このテキストを執筆していた頃のディケンズは、必ずしも労働者側に単純に同一化していたわけでないことを理解すべきだろう。次章ではディケンズが労働者に対してどのような位置関係にあったかを、当時の書評を手掛りに考察を進めて

いく予定である。さすれば、ディケンズがテキストの主張をどのような形で人々に訴えていったのか理解できるだろう。それは、そのまま「キャロル」、「鐘の精」などの「文学テキスト」が一種の「メディア」として読者の間に没透し、受け入れられていったことを示すことにもなるからだ。

5 書評に見るディケンズ

ここで当時の書評を振り返ってみよう。1845年4月の「テイツ・エディンバラ・マガジン」(*Tait's Edinburgh Magazine*)にセオドア・マーティン(Theodore Martin)というエディンバラ在住の弁護士がボン・ゴウティーエ(Bon Gaultier)という筆名で主に「キャロル」、「鐘の精」の書評を寄せている。形式的にはオマリイ(O'Malley)、ボン・ゴウティーエ、ヤング・スコットランド人の(Young Scotland)三人の鼎談という、後のワイルドを思わせるような対談形式で進められている。その中の一人のスコットランド人が、作家の描く紳士像に触れ、この頃のディケンズの立場を鋭利に分析している。

I think that common gratitude . . . might have mitigated his inveterate hatred of what he can neither understand nor feel — the position of a British gentleman. He was obliged to fight his way upwards, and I must needs say that he fought it manfully: at the same time, no obstacle was thrown in his path. He attained, by the force of his talents, such as they were, an eminence which, in all probability, exceeded his most sanguine expectations. But that very success has spoiled him: he is not comfortable in his new place, and he cannot help showing it.

(Collins, ed. 173)

また「パーカーズ・ロンドン・マガジン」(*Parker's London Magazine*)は、ディケンズが「ボズのスケッチ集」(*Sketches by Boz*)で“his sudden and great fame” (168)を得たものの、最近作「ニコラス・ニッケルビー」では文

体上の相違が甚だしくなったと指摘し、当初は “his inimitable manner of hitting off the peculiarities of vulgar life, and of describing trivial and familiar objects which were daily before our eyes” (168) で異彩を放った作家も、次第に変容を来したと批評している。先に引用したマーティンの書評では、それを裏付けるかのように “He was obliged to fight his way upwards” (173) と奮闘して得た “a British gentleman” という地位も、作家にとって必ずしも “comfortable” ではない、とやんわりと皮肉っている程である。題材を見れば “the peculiarities of vulgar life” からディケンズの視線が紳士階級、中産階級へと向けられつつあったと思われる。この指摘は極めて示唆に富む。とりわけ、『鐘の精』で展開される社会批評で、ディケンズがどの階級に軸足を置いていたかが判るからだ。

ディケンズの立場はその点、かなり曖昧である。上・中流階級に対して、労働者階級の置かれた立場を訴えるという形を取りながらも、労働者とは必ずしも一体化しているわけではないため、テキストから発せられるメッセージは、あくまで上から下に向かうという、上意下達で労働者の許に届けられるのである。理解しやすい例は『鐘の精』のトロッティ・ヴェック（以下、トービー）と娘のメグの例である。手元の “last week’s paper” (100) を読みながら、トービーは “It seems as if we can’t go right, or do right, or be righted” (101) と同じ階層の人間が犯した罪ゆえに絶望的な気分に襲われる。また、メグも父親に新聞を読んで聞かせた時に眼にした記事に触れ、 “we poor people are supposed to know them all. Ha, ha! What a mistake! My goodness me, how clever they think us!” (103) と “the Judge” の自分たちへの期待感を笑っているのである。しかも、ファイラーが “The good old Times!” (111) というと、それに同調するかのようにトービーは “There is no good in us. We are born bad” (111) と再び卑屈な態度へと舞い戻ってしまう。批判されるのが、労働者の卑屈な態度であることは、鐘の精が “have you never dreamt us wrong in words?” (143) とトービーに向かって言う箇所でも知らされる。

'Who heard in us, the Chimes, one note bespeaking disregard, or stern regard, of any hope, or joy, or pain, or sorrow, of the many-sorrowed throng; who hears us make response to any creed that gauges the amount of miserable food on which humanity may pine and wither; does us wrong. That wrong you have done us!' said the Bell. (144-5)

鐘の精は貧しき者に対する同情心を失いつつあったトービーを激しく非難しているのである。以降、夢から覚めたトービーが改心するというお決まりの粗筋で大団円を迎える。しかし、テキストの結末は読者に取り必ずしもカタルシスが得られるものではない。なぜなら、批判されるべき人物は市参事会員のキュート、ジョゼフ・ボウリー卿などの支配層の人物あり、このような人物の「改心」こそ物語の中心となるべき筈だからだ。つまり、本来、救済の対象であるはずの貧民層を説教の対象と捉えたために、批判されるべき支配層は不問に付されるという捻れが生じてしまったのである。この捻れが下層階級を物語の対象にしながら、中産階級へと目配せするディケンズの不安定な階級的な位相に負っている事は言うまでもない。忘れてならないのは、あくまでそのモラルが下層階級に向かって発せられているわけで、その意味では「キャロル」、「鐘の精」はスマイルズ (Samuel Smiles) の『自助論』 (*Self-Help*, 1859) 『節制』 (*Thrift*, 1875) らに近い啓蒙的な、道徳的な役割をも (労働者たちに対して) 果たしたと言えるのではないだろうか (Briggs, 140)。

それでは、ディケンズはそうした批判の捻れをどのような形で解消したのだろうか。或いは、解消したかのように納得させることが出来たのであろうか。つまり、どのような形でディケンズは自らの主張を発信したのであろうか。その社会批評のありようこそ問題にすべきだろう。そこで、再度、主人公の「改心」のありかたを検討するために、ボブ・クラチットの祝宴の箇所をもう一度、思い出してみよう。

6 社会批判の身体性

ボブ・クラチット家の祝宴が、飲食の行為の政治性を露出させる重要な契機であることは既に述べた通りである。それに加え、もう一つの意義は、それがスクルージの「改心」(conversion)の機縁となったことである。但し、これは単にプロットの転換点というのみならず、祝宴の「作用」,「効果」の働きかけがいかに象徴的だからである。ウォーターズが“Scrooge’s struggle to blame the arrival of this spectre upon his own indigestion . . . signifies his exclusion from those convivial feasters in Dickens’s fiction . . . whose capacity for fellow-feeling is manifested through the healthiness of their appetites” (Waters, 76) と指摘しているが、これは多少、回りくどい。言い換えれば、スクルージがクリスマスという家庭の祝宴に復帰する事が、その参加者の健康な食欲により自らの感覚を回復し、それにより他者と向き合い、失った己の姿を取り戻すという過程に他ならない。クリスマスの祝宴の華やいだ雰囲気は、まず何よりもスクルージの感覚に、身体に働きかける。過去の幽霊が現れた時、スクルージは幽霊の優しい触覚と漂う香りにより、過去の記憶を回復するのである。

The Spirit gazed upon him mildly. Its gentle touch, though it had been light and instantaneous, appeared still present to the old man’s sense of feeling. He was conscious of a thousand odours floating in the air, each one connected with a thousand thoughts, and hopes, and joys, and cares long, long, forgotten! (29)

フェズウィッグ親方の一家のクリスマスの祝宴では“Sir Roger de Coverley”という踊りを皆が踊っているのを見て、“the strange agitation” (36)を感じる。また、クリスマスの準備で大わらわの街角の商店からは“the blended scents of tea and coffee were so grateful to the nose” (48) が立ち込め、“the candied fruits so caked and spotted with molten sugar as to

make the coldest lookers-on feel faint and subsequently bilious.” (49) と豊富な食材が嗅覚などの感覚に訴える形で、その存在感を主張しているのである。スクルージは同じ感覚を、現在の幽霊の傍らにいる時も経験する。持っている杖から香ばしい香りがするのに気づいたスクルージはこう尋ねる。

‘Is there a peculiar flavour in what you sprinkle from your torch?’
asked scrooged.

‘There is. My own.’

‘Would it apply to any kind of dinner on this day?’ asked Scrooges.

‘To any kindly given. To a poor one most.’ (50)

同じように、食事の場面で、感覚に働きかける件は、メグが父親に “Smell it, father dear” (102) と呼びかける件や、トービーの家でベーコンに舌鼓を打つファーンとリリアン (134) 姿にも見て取れる。いずれにせよ、スクルージはこうして感覚を刺激することで、頑なな心をほぐし、健全な良識と人間的な心を回復することになる。フレッドの家で行われた祝宴で皆が楽しそうに笑うその “so irresistibly contagious as laughter and good-humour” (60) に接して、 “as I hope to live to be another man from what I was” (69) と生まれ変わる決意をするのである。つまり、スクルージの改心は綿密な心理描写によって裏付けられるものではなく、あくまで感覚と感性を通して身体に訴えられた結果、生じるものなのである。

「悪かれた男」のレッドローも同じである。レッドローの場合、彼の改心を促すのは、味覚、嗅覚を介してではなく、音によってである。かって耳にした “the Christmas music he had heard before, began to play” (444) が彼に作用し、 “As he did this, his face became less fixed and wondering . . . and at last his eyes filled with tears” (445) と表情は和み、涙ぐむ。レッドローの記憶はやがて音楽の力によって回復したことが、ミリーの口から語られる (460)。レッドロー自身は “quiet music very softly played” (388) と形容さ

れるミリーの“every tone of her voice” (466) から “some lesson” (466) を学んだかのようにと言われる。そのレッドローが取り戻すのが、既に述べた「記憶力」である。これは、グランシーが指摘するとおり、「同情」の源であり、この世の善と悪を峻別するのではなく、それが分かちがたく結びついた、あるがままの姿を受け入れる感性と精神的な姿勢なのである (Glancy, xx)。更に、「炉辺のおおろぎ」のケイレブ・ブラマー (Caleb Plummer) の娘バーサ (Bartha) は、タックルトンの結婚式の日に視力を回復する。そして「鐘の精」では、トービー・ヴェックも The Bell から “Toby Veck, Toby Veck, keep a good heart, Toby!” (105) と励ましを受けているように感じるという。

こうしたキャラクターの感性と身体に向かって物語を進める手法は、マーシャル・マクルーハン (Marshall McLuhan) が言う、人間の身体的な、能力、感覚を広げ、関係や感覚のあり方すら変容させてしまう、メディアの性質を思わせるものがある (McLuhan, 7-23)。マクルーハンの有名な言葉、「メディアはメッセージである」をもじって言えば、ディケンズの場合、「(「クリスマス・ブックス」の) メッセージはメディアである」と言い変える事が可能である。ディケンズにとって大切なのは、個々のメッセージ内容そのものよりも、それが生み出す新しい感覚や関係のあり方なのである。つまり、「キャロル」等が社会に持ち込もうとして、人々を結び付けようとした「メッセージ性」こそ、理想的な家族の形姿であり、それを大規模な形で実行しようとしたのが有名な公開朗読だと考えられないだろうか。そして、マルサスに対する批判も、建設的な意見を主張するというより、読者の感覚や感性という身体に触れることで、ディケンズは新たな批判の形を持ち込んだのである。実際、「鐘の精」で市参事会員キュートは何ら懲罰の対象とならず、しかもトロツティらの生活も一向に改善した兆しがないことを見れば、具体策の欠如は明らかである。これは「炉辺のおおろぎ」や「憑かれた男」にも同様に当てはまる。ピアリー・ビングル夫妻やレッドローの下男スウィジャー家 (the Swiggers) の人たちの生活ぶりもつましいままである。繰り返すが、「クリ

「スマス・ブックス」のメッセージで重要なのは、その厳密な内容よりも、それによって齎される新しい感覚や人々の関係のあり方なのである。次章では、そのメディア性と公開朗読について触れ、結論とする。

7 公開朗読、「音（声）に結ばれた世界」

一見して判るように、「クリスマス・ブックス」の中では聴覚に訴える表題が目につく。「キャロル」、「鐘の精」、「炉辺のおおろぎ」などはその典型であろう。その中でも、とりわけ「鐘の精」の鐘の音が持つ意味は特筆すべきだろう。ディケンズがこのテキストの題名を思いついたのは、1844年のイタリア、ジェノヴァ滞在に遡る。ロンドンにいる時のように街の夜歩き（nocturnal walking）に不自由したディケンズは、創作に行き詰ってしまうが、ジェノヴァの夜の街に響いた鐘の音で執筆の手がかりを掴む、という有名な逸話がある。このことは、多くの伝記作者が述べている通りで、「鐘の精」の成立史やディケンズと都市の関係を論考するときは、よく言及されるようである。ディケンズの手紙を織り交ぜながら、エドガー・ジョンソン（Edgar Johnson）は次のように事情を伝えている。

Two days later he was longing for his London night walks again. "Put me down on Waterloo Bridge at eight o'clock in the evening, with leave to roam about as long as I like, and I would come home, as you know, panting to go on. I am sadly strange as it is, and can't settle." The sun shone, the water sparkled in the fountains, the bells clamored with an intolerable resonance that hammered his brain empty. But suddenly the title came, and he announced it to Forster in a letter consisting only of a quotation from Falstaff: "We have heard THE CHIMES at midnight, Master Shallow!"

The bells of the foreign city had evoked some reverberating chord within his imagination. (Johnson, 518-9)

伝記的な事実を辿れば、これは紛れもない事実なのだろう。問題は、ここでは触れられていない、鐘の音が連想させる意味である。ドイツ中世史家の阿部謹也は、中・近世のヨーロッパにおける鐘の音が、人々の意思疎通の手段として大きな役割を果たしていたことを指摘し、「鐘の音は都市や農村あるいは領主の支配圏に生きるすべての人びとを結ぶ絆としてきわめて大きな意味を持っていた。鐘の音が聞こえる範囲が領主の支配圏が及ぶ範囲であった」（阿部、228-9）と述べている。修道院での朝夕の祈りの時に用いられる鐘や週市や年市の開催を告げる鐘の音など、様々な鐘の音が共同体の絆として、時節、季節の節目に大きな機能を果たしていたことがわかる。そして、「世俗における役割を失った鐘は今でも教会の塔を通して人と人との関係のひとつの絆としての意味をもちつづけているのである」（阿部、247）と結論付けている。西欧人には、ごく当たり前のことなのかもしれないが、非西欧人で、とりわけ非キリスト教圏の者には、鐘の音の持つ意味は気づきにくい。鐘の音が持つ直接的な意味は時代により変遷は免れなかったにせよ、共同体の象徴、そして「鐘の音に結ばれた世界」という聖なる空間という通念は根強いものがあつたようである。そのような通念が前提としてあるからこそ、ディケンズが創造した虐げられた貧民のトービー・ヴェック、リチャードの物語が共感呼び、受け入れられたのではないだろうか。ところで、阿部は論文の最後で近代の鐘の音の果たす役割を謡った有名な詩として、フリードリッヒ・フォン・シラー（Friedrich von Schiller）の「鐘の音」（*Das Lied von der Glocke*, 1799）に言及しているが、ディケンズの「鐘の精」を読み、同じシラーの詩を挙げている批評家がいるのは誠に興味深い。1845年1月の「クリスティアン・リメンブランサー」（*Christian Remembrancer*）には、“The pathetic passages are among the most turgid”（161）と批判しながらも、そこに見られる様々な影響関係を“the influence of the chimes, and the leading idea of the story, is taken from Schiller’s Song of the Bell: the mysterious affection and attraction between the Bells and Toby Veck may be traced to Quasimodo, in Victor Hugo’s *Notre Dame de Paris*”（Collins, ed. 161）と指摘

する。つまり、鐘の音とはディケンズや当時の批評家、読者には自明でありながら、我々にはいまひとつ分かりにくい前提となるもの、鐘の音によって結び付けられた聖なる空間を表わす精神的紐帯を意味するのではないだろうか。引用した書評から判断する限り、19世紀においてすら、そのように受け止められていたように思われる。

「クリスマス・ブックス」の諸テキストも、指摘した表題以外に音声面にディケンズが配慮した工夫が伺える。同一語句を多用し、文体に律動感を齎したことである。ここで、文体について詳述する余裕はないので、簡単に指摘しておく。「キャロル」の冒頭では“sole”という語や(5)、スクルージの喜びようを表わすときは“chuckle”という言葉が反復される(86-7)。「鐘の精」、「炉辺のおおろぎ」の冒頭ではblank・ヴァースが用いられ、「愚かれた男」では“small”という語やwhenで始まる従属文が幾重にも積み重ねられ、律動感に富む文体を成している(400, 375-7)など、多くの例が挙げられる。こうした、文体が公開朗読にうってつけなのは言うまでもないだろう。実際、ディケンズは1853年から亡くなる70年まで、実に472回もの公開朗読をこなしている。その大半は1858年以降といわれる。公開朗読の演目には、「キャロル」、「炉辺のおおろぎ」、「鐘の精」、「愚かれた男」の原稿が存在するものの、「クリスマス・ブックス」の中で実際にディケンズが公演したのは前の三作のみであったという。とりわけ、公開朗読のさきがけとなったのは、1844年12月にイタリア、フランスから戻ったディケンズが、カーライルやダグラス・ジェロルド(Douglas Jerrold)、フォスター(John Forster)を前に「鐘の精」を朗読したのがきっかけだといわれる(Page, 265-6)。ディケンズが公開朗読を思いつく契機となるテキストだったとすれば、「鐘の精」が持つある種のメディア性を作者はある程度、意識していたのかもしれない。

ところで、ディケンズの作家としての特徴としてよく挙げられるのが、視覚の特異性である。これは、ディケンズの幼年時代の体験を例に挙げながら、よく指摘される特性である。その中で、最良の批評として作家の辻邦生による「小説への序章」(1979)が思い浮かぶ。辻は「デイヴィッド・コッパーフィー

ルド」のリティマー (Littimer) というステアフォース (Steerforth) の下男の人物造型のあり方を、「何らかの客観的な対象の分析的な描写」をも介在させない「人物の全体像の直感的な把握」(237) として捉える。「品位」(respectability) という抽象概念を視覚化したようなりティマーの場合、「品位」は肉化され、形象を持ち、動きまわることによって、一個の塑像性を獲得してゆく」のであり、「この意味で「観念」は、いわゆる抽象的な概念ではなく、対象と主体との関係を規定する心情的な内容と考えることが出来る」(238) と指摘し、ディケンズ特有の空間・風景描写を数多く挙げている。つまり、近代のプロバール (Gustave Flaubert) とは対照的なリアリズムのあり方としての、ディケンズの映像効果を問題にしているのである。しかし、ディケンズが動員した感覚は何も視覚のみばかりでないことは、見てきた通りである。現在の幽霊の松明が醸し出すかぐわしい香り、ミリーの優しいささやき声でかつての自我を取り戻すレッドローなど、あらゆる感覚に訴えることで新たな認識、記憶を取り戻す様は、それこそブルースト (Marcel Proust) の「失われたとき」の一場面、マドレーヌの香りからコンプレーを思い出す場面を髣髴とさせる。つまり、「主体の情動性」を最もよく現している空間は、ディケンズの場合、専ら視覚の優位性にのみ拠るのではなく、聴覚、嗅覚等あらゆる感覚に訴える可能性を秘めたものと言えないだろうか。それを、大規模な形で実現したものが公開朗読だと思われる。

フェールはディケンズとマルサスの関係を論じた先駆的な論文の中で、ディケンズはカーライルの影響を足がかりに、批評を展開したものの、“Dickens bekümmerte sich wenig um die Politik im gelehrten Sinne des Wortes. Für ihn war Politik mehr ein Instinkt als eine Wissenschaft” (Fehr, 544) と、「本能」としての批評のありようを指摘している。ディケンズの批判精神に影響を与えたのはカーライルのみならず、ダグラス・ジェロルドも同様に大きな存在であることは、後にマイケル・スレイター (Michael Slater) が一連の論文で実証することになる³⁾。いずれにせよ、ディケンズの批評は実績をひとつ、ひとつ積み重ねるような建設的な類のものではなく、“ein

Instinkt” (Fehr), つまり皮膚感覚に訴えるものである。しかし、だからこそ身体と感覚という新たな領域を社会批評に取り込むことで、読者、作家の共通感覚としての社会批評にすることが出来たのである。もちろん、これには公開朗読という読者と作者の新しい関係、絆を築くことに成功したからに他ならない。それは、また同時に、「クリスマス・ボックス」というテキストが、身体と感性に訴える社会批評という新たな領域を作ることによって、そのメディア性をも遺憾なく最大限に発揮したということの意味するのだ。

注

- 1) 労働者の悲惨な生活が実写されているのは、「骨董屋」のネルとトレント老人の逃避行が始まる15章、そしてトレント老人の手癖の悪さから、ネルがたまたま老人を連れて再び逃避行を始める44、45章で見ることが出来る。そこに見られる労働者がどちらかという温情的な、paternalisticな関係を求めていることを、当時流行の中世主義の文脈で述べたことがある。それについては、次の拙論を参照。「涙の風景、涙の共同体：『骨董屋』におけるノスタルジー」（愛知県立大学文学部論集 英文学科編53号、2005年3月）
- 2) ウィリアム・ファーンの住居が当時の労働者のそれとして、ごく一般的であった例として、ディケンズの謎の多い掌櫃、*George Silverman's Explanation* (1868)を思い出せばよい。この中で、主人公は自分の幼年時代を“My parents were in a miserable condition of life, and my infant home was a cellar in Preston” (202)と回想している。プレストンはイングランド北部の工業都市なので、この“cellar”が当時の労働者の住居と考えられる。ちなみに図②の作者はクラークソン・スタンフィールド (Clarkson Stanfield) で、これ以外に数点の挿絵を寄せている。スタンフィールドの挿絵では、ファーンの家はピクチャレスクの構図に収まっており、どちらかといえば農業労働者のそれを思わせる。そのために、本来、労働者の悲惨な生活は幾分、牧歌的に模倣されているように思われる。ちなみに、図①の作者、マクリースも「炬辺のおろぎ」や「人生の戦い」の扉図を描いて

おり、ディケンズにとってマクリースが他の挿絵画家よりも比重が大きかったことが伺える。

- 3) ディケンズが社会批評において、カーライルの影響を被っていた事は早くから指摘されており(とりわけ「過去と現在」)、文学史の殆ど常識に属する。その分、ダグラス・ジェロルドの影響はマイケル・スレイター(Michael Slater)が評価するまでは、殆ど等閑視されていた。スレイターによれば、ディケンズはジェロルドの *The Story of a Feather*(1843) という“vigorously Radical novel”(Slater, *Dickens Centennial Essays*, 203) を高く評価し、その旨を友人のフォスター(John Forster)に書簡で話題にしている。これは「パンチ紙」に1843年の2月から12月まで連載された小説で、50年代に流行するギャスケルらの社会小説の走りと思われる。「鐘の精」のメグは、この小説のヒロイン、パティ(Patty)を下敷きにしているという。スレイターは他にも「鐘の精」の背景を当時の新聞、雑誌記事を基に再現している。なお、スレイターの論文については、参考文献欄を参照すること。

参考文献

- Briggs, Asa. *Victorian People*. Harmondsworth, Penguin Books, 1975.
- Collins, Philip, ed. *Dickens: The Critical Heritage*. London: Routledge and Kegan Paul, 1971.
- Dickens, Charles. *Christmas Books*. Ed. by Ruth Glancy. Oxford: Oxford University Press, 1988.
- Dickens, Charles. *Master Humphry's Clock and other stories*. Ed. by Peter Mudford. London: J. M. Dent, 1997.
- Engels, Friedrich. *The Conditions of the Working Class in England*. Harmondsworth: Penguin Books, 1987. Trans. of *Die Lage der arbeitenden Klasse in England, 1845*.
- Fehr, Bernhard. “Dickens und Malthus”, *Germanische-Romanische*

- Monatsschrifts*, 2 (1910): 542-555.
- Johnson, Edgar. *Charles Dickens*. Vol. 1 London: Victor Gollancz Ltd, 1953.
- MacLuhan, Marshall. *Understanding Media*. London: Routledge and Kegan Paul, 2004.
- Page, Norman. *A Dickens Companion*. London: Macmillan, 1984.
- Shorter, Edward. *The Making of the Modern Family*. New York: Basic Books, 1977.
- Slater, Michael. "Dickens Tract for the Times". *Dickens 1970*. New York: Stein and Day, 1970.
- Slater, Michael. "Carlyle and Jerrold into Dickens: A Study of *The Chimes*", *Dickens Centennial Essays*, ed. Nisbet, Ada. Berkley: University of California Press, 1971.
- Waters, Catherine. *Dickens and the politics of the family*. Cambridge: Cambridge University Press, 1997.
- 阿部謙也. 「鐘の音に結ばれた世界」, 「中世の星の下で」所収, 東京: 筑摩書房, 1986.
- 辻邦生. 「ディケンズと映像」, 「小説への序章」所収, 東京: 中央公論社, 1979.